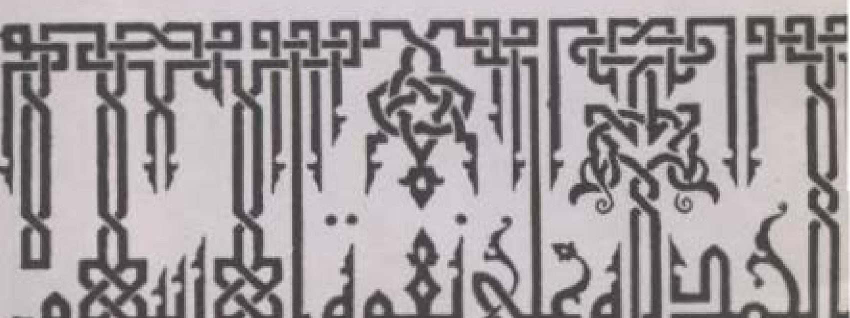
宗教は過去のものか

الدين والحياة المعاصرة

ムハムマド・アサッド



ISLAMIC CENTER, JAPAN

宗教は過去のものか

الدين والحياة المعاصرة

ムハムマド・アサッド

ISLAMIC CENTER, JAPAN

宗教とは過去のものか

ムハムマド・アサッド

目次

一、まえがき …… 4
二、宗教＝倫理と道徳の源泉 …… 5
三、今日の宗教 …… 8
四、宗教と西欧社会 …… 12
五、イスラームについての考察 …… 17
六、異論の分析 …… 21

一、まえがき

人間の意識が目覚めはじめた太古の時代から、宗教は人間を未知の終着点へと駆り立てるひとつの強力な働きを持ってきた。駆り立てる力は宗教だけでなく、飢餓もそのひとつであり、また人間の野心もそのひとつであった。しかし宗教は、これまでの人類の長い歴史を通して、良きにつけ、悪しきにつけ、常にその中心的な位置を占めてきた。

宗教の名のもとに幾多の王国が建設され、国家が成立し、また王国が破壊され、国家が滅んだ。宗教の秘める力のもとに、愛と自己犠牲の極にまで達した例もあり、反面その力を暴力と圧政に用いた例もあった。宗教は多くの人々に生きる指針と大きな喜びを与え、また一方では人々に人生を空虚な幻影として軽蔑させせしめたのである。さらに人々に創造的な情熱と不朽の文化的功績を打ち立てるほどの力を与え、また一方では迷信的な慣習や愚鈍さへと追いやったのである。いずれの形にしても、宗教を信じたすべての人達にとって、宗教は幸福をもたらすものであったことは否定できない。

宗教観の相異こそあれ、すべての宗教のなかに、人々を動かす「なにか」が内在していたことは疑う余地はないであろう。

二、宗教＝倫理と道徳の源泉

この「なにか」とは信仰をもつ者だけが認識し得るひとつの最終的な真理である。すべての宗教の核は、まず第一にこの世の中に存在するすべてのものは、創造者の意志によって造られたものであるということ、次に人間はその〝意志〟によって生活を送る存在であるということになる。

なぜならば、もしわれわれ人間が、ある一つの絶対的な創造者の意志をすべての物の根源と考えない限り、人間の目的と行動が本質的に正しいか否か、また道徳的か否かを判断する基準を失うからである。

人間には何か一つ中心となる信仰（核）がなくては、道徳観はその正確さを失う。それはまず曖昧な信念となり、次に単なる何かの「方便」になりさがって、遂には消滅してしまうのである。すなわち、ひとつの目的や行動が特定の人間や社会（国家）にとって有益かどうかという問題になってしまうのである。そして最後には〝善と悪〟の価値基準は相対的な概念となり、個人（または共同体）の要請によって都合の良いように解釈され、時代の経済的情況の変化にともない揺れ動き、ついには風化してしまうのである。

道徳の領域に関する宗教的思索は、とくに現代の反宗教的傾向をみる限り、たしかに最重要のテーマであろう。今日、一部の知識人たちは、宗教が未開時代の遺物であり、「科学の時代」を生きる現代人にとって、全く無意味な存在であると説いている。「科学」は過去の抜殻のような「宗教」

にとって代わるものであり、無限に進歩し、純粋理性に従って生きることを教え、最終的には形而上学的な拘束を受けることなく、新しい道徳基準を作ることを助けるものであると主張している。しかし、このような主張は、十八世紀から十九世紀にかけての愚かなヨーロッパ的楽天主義の無批判な受け売りにすぎない。その時代、とくに十九世紀の後半において、ヨーロッパの多くの科学者たちは、宇宙の神秘を解明すること、そして人間があらゆるものから自立し、神のように完全な理性を獲得することは、目前に迫っていると考えていた。しかし最近、思想家たちは、この考えを完全に否定してはいないが、多少違った考えを持つようになってきた。

すなわち「完成された科学」でさえも、精神的な希望を、完全に満たし得ないことを認識し始めたのである。

この大宇宙がいかにして成り立ち、生命がどのようにして誕生したかを、人間の科学で簡単に解決できないことは、日々明らかになってきている。同様に、人間存在の本質やその目的を解明することはなおさら不可能であろう。しかしわれわれは、そこに回答を与えないかぎり「善」と「悪」とを明確に区別することはできない。このような基準は、人間存在への洞察（真実であれ、間違いであれ）にもとづかないかぎり、全く意味がないからである。

したがって「善」と「悪」とを定められないならば、道徳の規範も失なわれてしまう。このことを現代の進歩的な科学者たちは、明白な事実として認識し始めている。かれらは自然科学が人間の諸問題を解明できないことを認識し、過去二世紀の子供じみた「科学万能思想」を捨てた。科学を

軽視しているわけではない。科学の進歩は人類に多くの新事実を提供する。しかしそれは人間の道徳的生活と直接の関係はもたない。

科学はたしかに人間の心理や、取り巻く環境をより深く理解するためには必要なものである。しかし森羅万象を分析し、その法則を見出そうとするだけでは、人間存在の目的（そのようなものがあるとして）を解明し、人間に道徳的自覚を与えることはできない。科学的思索をいかに深くめぐらしてみても、道徳の問題は科学の範囲には見つからない。それは宗教の領域にしかないのである。

その正誤は別として、我々は宗教的経験を通して、日々の生活のなかから道徳的規範と倫理的価値を見出してきたのであり、決して科学的知識によって認識してきたのではない。ここで「正誤は別として」と特に述べたのは、いかなる宗教でもその形而上の前提が間違っている可能性は充分に考えられることであり、その宗教を信じるか否かはつまるところ経験と理性にたよるしかないからである。またそれによってこそ人間は、特定の宗教がどの程度肉体的精神的な要求を満たしてくれるかを知ることができる。経験と理性を用いることは絶対必要ではあるが、人間の生活を意義あらしめるものは、あくまで宗教以外にはない。人びとは宗教を通じてのみ、微視的な生活の断片の連続から独立した、ひとつの定まった道徳価値によって行動しようとする。言い換えれば、人々のなかに、善なるもの（したがって望ましいもの）、と悪なるもの（したがって厭むべきもの）についての幅広い合意の基礎を作り上げるのは宗教以外にはないということである。しかも、このような「合意」なくして、人間関係のなかに何らかの秩序を作ることはできない。

このような観点から研究してみると、次のことが考えられる。すなわち最も広い意味での宗教的衝動というものは、人類発展の歴史のなかで過ぎ去って行くひとつの事象ではなく、また時代が乗り越えてゆく薄っぺらな軽信でもなく、倫理と道徳の永続的な原動力である。それはあらゆる時代と環境を通して、人間の基本的かつ真実の要求に対する唯一の回答であり、言い換えれば宗教的な衝動こそ人間の本能といえるであろう。

三、今日の宗教

現代は人間の宗教心がきわめて衰微している時代である。それは、人間の本性そのものが「堕落」したからではない。人間の本性は本来「善」または「悪」であり、ときとして無私と理想の状態にまで達し、また残虐と貪婪のレベルにまで堕ちるが、物質的利害を超越した、さらに大きいものを得ようとする本能的欲望を失ってしまったわけではない。

その表われが今日の共産主義や国家主義に見られる疑似宗教的熱情なのである。こういった活動は真の宗教の貧弱な代用品に過ぎず、過去数世代の人々が感じていたものとまったく同じように、現代の人々も宗教の必要を潜在的に感じているはずである。本物が与えられないため、疑似的なものをつかむのだ。本物は拒絶されているのだ。

宗教人は、「どうすれば宗教の理念にそって実生活を確立できるか」をまったく教えていない。そのため多くの形式的宗教は、実際の問題からかけ離れてしまう。

さらに社会経済的見地からは、現代は混乱の時代であり、宗教者からの実際的指導の欠落のために、世はまさに破滅的様相を呈している。科学の急速な進歩がもたらした、産業、通信、福祉などの面における超高速回転が、以前働いていた社会システムを遊離させてしまった。衣食住、身の安全、職業と教育などは、きわめて複雑なものとなり、いまや大きな社会問題となりつつある。もっとも、これらはいつの時代でも重要問題であった。人々は常に衣食を求め、貧困から逃れようと望み、そして生活の安全を目指していたが、今日ほど社会が複雑でなかった時代には、問題は簡単に解決できたので、現代ほど絶望的に人々の心を支配することはなかった。科学の驚異的発達は、我々人間の存在条件をまったく変化させてしまった。科学の発達は、人間活動のほとんどの面で、予期しない明るい見通しを開いたが、同時に数多くの複雑な問題ももたらした。多くの事が科学によって可能になり、そのうちのあるものは創造的で希望に溢れ、またあるものは破壊的で恐怖をもたらした。このようなことはこれまでの社会通念では、まったく予測できなかった事態であり、人々にはその心構えができていなかったのである。当然、この新しい状況に適応するための経済的技術も、道義的成熟も、持っていない。解決方法への模索は、かえって多くの対立するイデオロギーを出現させ、人々を熾烈な闘争に巻き込み、昔からの思考の基礎を打ち砕いてしまった。

この社会と経済の混乱は、物質面のみにとどまらず、信仰の領域まで侵した。今では、政治と経済の基盤であった倫理と信仰に対して、広範囲の批判が起きている。特に昔からの慣習を無批判に固守してきた、今日の宗教指導者たちが、現代の困難の解決にまったく無策である限り、当然起こるべく起きた

混乱であろう。現代社会での深刻な不安は、倫理面での荒廃を片割れとして悪循環を繰り返している。

今の社会経済感覚の中で、相対的に何が善であり、悪であるか（いいかえれば、どのような社会形態が人類全体のために「善」であるか）という疑問は、絶対的価値の中で、何が善であり、悪であるかにつながるものであろう。現在の経済組織の単なる再編成、すなわちあるイデオロギーの勝利が、現在の混乱に何か秩序らしいものを、打ち立てることができるかどうかについては、強い疑問が生じている。最近の考え方は、単なる政治的経済的対立より遥かに深い何かが、今日の混乱の原因であるという見方に進んでいる。

その「より遥かに深い」ものは、道徳的価値のあらゆるレベルでの崩壊であろう。我々は今や現代の危機が、結局はモラルと倫理観念の危機であることを自覚している。

これまで人間の社会関係を形造ってきた倫理概念のほとんどすべては、今や厳しい試練にさらされており、現代生活の要求を満たし得なくなってきた。世界の宗教指導者たちは、これまで広く一般に行われてきた社会慣習に宗教それ自体を埋没させてしまい、人間の実際的努力を導くことができなかった。

数百年来の宗教信仰は、揺り動かされ、一つの坩堝の中に投じられている。そして、これらの信仰と結びつけられ、永遠の土台に立つと考えられた、多くの社会的慣習は、今や特定の社会集団のみでなく、世界中で打ち砕かれつつある。今や宗教は退潮にあり、その代りの感情と信念、つまり

「科学時代」の始りに対する子供じみた熱狂によって、あるいはより危険な「ナショナリズムの神」への熱烈な崇拝によって、取って代わられつつある。

我々の時代の特徴である「ナショナリズムの崇拝」は、宗教に似かよった感情的および神秘的な色合いを持つ。しかし宗教が絶対的「善悪」の概念（それぞれの宗教によって相違はあるにせよ）で一貫しているのに対し、ナショナリズムは、その真の本質においては絶対的善悪の存在を拒否している。ナショナリズムは相対的な価値においてのみ「善悪」を認めている。すなわちナショナリズムは、特定の国家の発展のための「善悪」にとどまり、倫理と道徳の真の基礎を破壊するものである。

一度は信仰と希望に満された人間生活は、今や大きく口を開いた空虚と絶望によって占められつつある。現代社会で人間を揺れ動かしている物質的道徳的闘いの苦しさ。国家や組織の主として恐怖を媒体とする、救いのない権力闘争の汚なさ。権利と正義の軽視、強者による弱者からの搾取、そして人間相互の不信。これらは現代人が苦しみ悩んでいる倫理的不満の兆候に過ぎない。それは戦争や民間競争のすべてにあらわれ、人々の身体と心にはかり知れない不幸をひき起こしている。社会的のみならず、個人の道徳的不安でもある焦燥。未知の予測できない方向へ洪水に押し流されているような焦燥感——。

四、宗教と西欧社会

このことはイスラームの世界にもあてはまる。他の人々同様、我々イスラーム教徒も渦巻く不安の洪水の中で生きている。道徳的混乱の時代である。社会は激しく揺れ動いている。昔からの慣習の多くは、西欧文明の影響による経済的圧力の下に、いま崩壊しつつある。本来のイスラームに戻ろうというスローガンにもかかわらず、イスラームの教えを生活の原理として適用しようとする者の数は、きわめて少ないのが現実である。

イスラーム教徒の中でも、西欧化した「進歩主義者たち」はこれを否定してはいない。かれらは「時代の精神は宗教的思想と相反する」と主張している。まさしくそのとうり、時代の精神は宗教的思想に反してはいる。しかしそれは、西欧社会とその歴史の中でのみいえることであり、イスラームの世界ではあてはまるはずがない。西欧の思想家たちが宗教とは別の方向に進むなら、その立場はキリスト教の硬い支配の歴史から見て、よく理解できる。

イスラームの歴史には、そのような芽を摘む圧力はいっさい無かった。イスラームの宗教概念とその歴史は西欧のそれとは異なった性質のものである。その違いはきわめて大きく、それを比較する時、はじめて、人々が宗教を捨てたのではなく、西欧が育んだその特殊な奇形に反発を感じたことが理解できる。

キリスト教は誤りを犯し、失敗しているのである。それは人生の現実的な面、すなわち肉体生活、

肉体的要求と願望、経済と政治などから、キリスト教そのものを遊離させてきたからである。キリスト教では、「神のもの」（すなわち倫理と道徳）と「皇帝のもの」（すなわち政府、経済および社会組織の分野）との間に、はっきりと境界線を引いてきた。それは現世での「自然な生活」を悪とみなし、「超自然の霊性」との間には越えられない溝があると主張する教義の倫理的矛盾であろう。

キリスト教神学は、「精神」と「物質」を本質的に相反する実体としてとらえている。その考え方は、「物質」を悪の領域に入れ、「物質」への愛着は悪への愛着と同義であるとみなしている。それゆえキリスト教でいう「贖罪」とは、物質への欲望の罠から自分自身を解放し、「原罪」と呼ばれる行為によって堕落した人間が、元の理想の姿に戻ろうと努力することを条件としている。

キリスト教形而上学の創始者パブロは、すべての罪の根源は「肉体」にあるとし、キリスト教の倫理は肉体的な面を非難することに向けられてきた。キリスト教神学がどのように変化してきても、肉体面への蔑視が教えの根本にあることとは、疑う余地もない。

教会が倫理の唯一の源泉であったヨーロッパ中世においては、そのような考え方に疑義を抱く者はいなかった。人間生活の肉体面におけるすべての感覚と欲望は、単に劣等としてではなく、精神生活に反するものと見なされていた。

キリスト教が西欧の精神世界に与えてきた影響力の多くを失い、肉体の権利が高められてきた今日でさえ、「官能的」という表現になおつきまとっている軽蔑的意味は、キリスト教の倫理背景を

十分に物語っている。
それについての一つの例をあげよう。
「イスラームの予言者ムハムマドは、精神的に高尚な人物ではなかったはず。なぜならば、かれは性生活を楽しみ、信者たちにもそれをすすめたのだから」という西欧に広くゆきわたっている幼稚な仮説の中にみることができる。弁解がましい、キリスト教の近代解釈においてさえ、その反官能的、反肉体的姿勢が十分見うけられる。
キリスト教が教徒の心に課した苦しい葛藤は、教会が人間存在の最も自然な部分、すなわち男と女の接合を否定したことにあり、それが、「原罪」の永遠のシンボルであることを想起すれば十分に理解することができよう。
しかし、当然のことであるが教会は不可能を可能にはできなかった。人間生活から「性の衝動」を排除することはできなかったし、「物質」を「邪悪」と見なしたにもかかわらず、人間の世俗的かつ自然な興味や、「物質」面での進歩に対する願望を抑制することはできなかった。
中世の初期、一つの妥協が行なわれた。教会は人間の世俗的な欲望を「必要悪」である、ということに暗黙の了解を与えた。そして人々はあえて宗教に反対する必要はなく、ただ宗教理念と現実とを区別すればよしとした。このように教会は、人間生活の実際的現実的側面(すなわち教会が征服できず、認めざるを得なかったもの)を宗教の領域外に追いやることによって、指導範囲を縮少させながら、人々に対する影響力の一部だけでも守ろうとした。そこではじめて、宗教とは人生の

ごく一部にすぎず、生活のほとんどは宗教とまったく関係がないという、西欧の代表的考え方を生み出したのである。

そのようなわけで、ヨーロッパ人やアメリカ人が、実生活において、キリスト教の信条にしたがえないのは、道徳心が欠落しているからでは決してないことがわかる。教会が教義の実生活への適用を重視したことはなく、実行不可能な理念を提出することにのみ終始していたことが、その事実であろう。

近代のキリスト教思想家も、以下の引用文に見られるように、教会のこのような姿勢に同調している。

「新約聖書の中でのべられている絶対的基準は、キリスト教徒に実行するよう義務づけられているにもかかわらず、遂行不可能な一つの理想像にすぎない。福音書に記録されている、道義的教義や絶対的信条は、日常生活に直接適用すべきものではない」（E・バーカー、R・プレストン共著、「社会の中のキリスト教徒」より）

キリスト教と異なった宗教理念の下で育ったイスラーム教徒にとって、実際問題から離れた倫理が存在するという考え方は、まったく不思議に聞こえるに違いない。現在見られる西洋文明の崩壊現象は、キリスト教が押し進めてきた、この非現実的な二元論に本質的な原因を求めることができる。千五百年以上もの永い年月にわたって、西洋の倫理と道徳を培かってきた考え方は、すべてキリスト教から派生したものである。千五百年以上の間、ヨーロッパ人は道徳が実生活で通用するも

のではなく、倫理はどこまでも倫理にすぎず、生活は「倫理」に左右されるものではないことを組織的に教えられてきた。

現在西欧世界に見られる破局は、その原因を「道徳的信念」と、社会やグループの利益につながる限り、どんな不道徳なことをしても良いという「便宜主義」の間に一線を画す、二元論的習慣に求めることができる。

西欧の経済人政治家のうち誰一人として「便宜主義」を否定しない者はいないが、それを打ち破る道義的信念を持つ者も見あたらない。キリスト教は長い間、美しい理想を説いてきたが、それは教会で説教をするためには「まことに結構だが、実生活は違う」と受けとられたものである。

キリスト教は何世紀もの間、ヨーロッパ人の体験してきた唯一の宗教であったため、キリスト教がすなわち宗教そのものであると考えるように慣れ育ってきた。そのため「キリスト教への失望」は、「宗教そのものへの失望」と思い違いされている。かれらはこれまで知っていた唯一の宗教の存り方に、失望するようになってきた。それは、来世での正義と幸福は約束するが、現世での厳しい要求に答えることのない宗教への反発なのである。

実際的効果のない、説教に閉じこもった宗教。社会的公正の樹立のためには何も貢献することのない教会。信仰の形、教義と超越的な希望は持つが、個人や社会生活についての積極的な綱領をもたぬ宗教。

教会がしばしば虐待や搾取に力を貸し、弱者を護らず、権力者にとって有益な社会組織を守るこ

とに奔走したことを、人々は良く覚えている。多くのヨーロッパ人は、宗教の名のもとで、再び武力と虐待の暗黒が再現されるのではないか、という恐怖を抱いている。そして、「宗教」という名が、不安の代名詞となりつつある今日である。

五、イスラームについての考察

以上のように、西欧の思想家には宗教に失望し疑問を抱く根拠がある。その点イスラームは成功を収めてきた。

先ず第一に、イスラームでは人間生活を「肉体」と「精神」の二つに分割することはなく、宗教を単なる精神界のものとしなかった。予言者ムハムマドは、その後半生二十三年間に、精神の問題だけではなく、個人の社会生活の基本姿勢を示している。それは個人と共同体の、精神と肉体の全般にわたる生活を包含している。肉体と精神の問題は、予言者ムハムマドの教えの中でまったく同等の価値をもっている。予言者ムハムマドは正しい社会と、そのような社会を形づくる人間像を示した。そこにはどの時代にも即応できる政治形態の原形があり、権利と義務の明白な定義が与えられている。そこには「物質と精神」「自然と超自然」の区別はない。イスラームでは過去に存在したもの、現に存在するもの、これから起るもの、すべてあくまで「自然」の領域に含まれる。

「創造」の総計である「自然」、見えるものと見えないもの、具体的なものと抽象的なもの、そして「自然の法則」などは、すべて神の造った「自然」に統合される。そのような事象の体制の中

では、人間存在の道徳面と物質面の間に矛盾は生じない。肉体と精神とは決して切り離すことはできないし、まして優劣をつけることもできない。

第二に、キリスト教の教会が西欧の社会の中でしばしば演じてきた不名誉な役割は、イスラームの歴史には、まったく見うけられない。イスラームの神学者と法律学者は、人間の権利の擁護者として大きな個人的代償を払い、時には命さえ捧げて、常に虐待や抑圧に対し立ち上り、人々から搾取を企む権力者に厳しい制禦を加えていた。

西欧の民衆が何世紀にもわたって味わった屈辱的で悲惨な状態からムスリムがまぬがれたのはそのためである。

第三に、キリスト教と科学の間には常に衝突があり、現代に至るまで、科学思想と科学者への偏見と迫害が続いている。

しかしイスラーム社会では、教育自体にも、先覚者の態度自体にも、宗教と科学との衝突の痕跡を発見することはできない。これは非常に重要な点である。というのは、ヨーロッパ人の宗教に対する主な異論は、実際にはキリスト教の超世俗性や科学無視の態度に向けられている。もしこれにキリスト教の教義が課しているきびしい重圧を考え合わせる時、「宗教は実生活と無縁である」というスローガンを理解することができる。しかし西欧の思想家たちは、キリスト教会の見解と態度が真の宗教の姿と合致しているかどうかを考えようとしなかった。西洋文明こそ最高の文明であるとみなす尊大さで、キリスト教の倫理こそ宗教が到達し得る最高のものと思い込んでいる。

さて、キリスト教は科学的思想に長年にわたって敵対してきたが、今日になって初めて、科学への敗北からいやおうなく、「科学と宗教との間に衝突は何もない」といわざるを得なくなった。しかし他の宗教が文化的敗北なしに同じ結論に達していた可能性はないだろうか。その宗教が科学との対立など一切ないところに樹立されていた可能性は考えられないであろうか。

私が使った「その宗教」とはイスラームのことを言っている。事実イスラームの歴史は科学に対して、キリスト教が示したものとはまったく違った様相を呈している。イスラームは科学に、そして広く知的な努力に、神聖な価値さえ与えているのである。キリスト教会の過去の記録 ― 学者達の火焙りや拷問、科学書の無慈悲な破棄、あらゆる階級の中での独自の思想の禁止 ― と目立った対照をなしていて、イスラームの社会では、新しい科学的発見をしたという理由だけで迫害された科学者の例はない。神学者間の対立はあった。時の「正統派」が反対派を攻撃することはあった。しかし、科学者への迫害だけは絶対になかった。それは、ひとえにイスラームが信者に学ぶことの価値と尊厳を教え、「知識の探求はすべての信者の聖なる義務」としたからである。それゆえ、科学史に歴然と残るイスラーム教徒の科学の分野での先覚者たちが、同時に際立った神学者であり、宗教哲学の優れた解説者でありえたことは、決して偶然のことではない。

イスラームの神学者たちは、科学知識の取得がすなわち神の崇拝に通じることを、聖クーランと予言者の言行録に目を向けるだけで確認できた。アル・ブハリーが引用した予言者の言葉、「神は治療法を与えることなしには、どのような病いをも下し給わぬ」を読んだとき、病気に対する未知

の治療法を探求することは、すなわち神の意志の実現への貢献であることを悟ったのだ。こうして医学の探求が宗教上の教義の神聖さを帯びるようになったのである。かれら科学者は、

「**われ**は水からあらゆるものを創造した」

（コーラン第二十一章第三〇節）

を読み、この言葉の深奥を極めるため、生きた有機体を研究し始め、そこに生物学を樹立したのだ。

コーランは、また創造主の栄光の証しとして、日月星辰の動きと調和を挙げその結果、他宗教が祈禱のための価値しか見出せなかったところに、イスラームは天文学と数学を樹立した。同様、かれらは生理学に、化学に、動物学に、そして他のあらゆる科学の研究にとり組んだ。そのような科学の研究の中で、イスラームの精神は独自のものを打ち立てていったのである。

はじめからイスラームの人々は、予言者が語った「科学者（訳注）は神の道を歩む」という物の考え方を受け入れてきた。そして科学的真理の探求者は、最高の栄誉を与えられ、科学的研究は社会的に保護され、十分に報われてきたのである。

イスラームの歴史の中で、創造的であった期間を通じ、すなわち予言者ムハムマドのメディナへの聖遷につづく五世紀の間、イスラーム文明以上の文明はなかったし、科学者にとって、イスラーム地域以上の安住の地はなかった。言い換えれば、人類の歴史の誇るべき一ページを構成する文化的偉業に動機を与えたのは、イスラームであった。

六、異論の分析

ここでは現代のヨーロッパ思想家たちの、宗教に対する反論を調べてみよう。

クリストファー・ドーソンはその著書「進歩と宗教」の中で次のように述べている。

「現代の世界の大宗教に対する批判は、決して根拠のないものではない。宗教の精神絶対論と形而上学的概念への集中は人間を、物質世界を無視するよう、そして実際の社会活動から離れたものに変えようとしてきた。しかしその「永遠」と「絶対」への先入観と、そこから派生する「来世的感覚」が相対的知識（自然科学を指す）の価値、あるいは人間生活自体を終局的に破壊すると思われるため、現代的精神とは相容れないのである。したがって、現代が求める宗教とは、急激な発展を遂げた物質文明や、社会的進歩に適応できる宗教であると思われる」

さて、この宗教への告発を公正に分析してみるならば、その一語一語がキリスト教や他の神秘的な宗教には、完全に当てはまることが確認できる。しかし、同時にそれがイスラームには決して当てはまらないことも良くわかる。かえって上記の引用文は、間接的にイスラームの立場を肯定し、そのすべてを確認しているのだ。

理解の困難な、あるいは理解不可能でさえある教義上の主張（例えば三位一体の教義とか、身代

り贖罪の教義）を持つキリスト教には、多くの精神的絶対論があることは疑いないが、イスラームの教義の中にはその種のものは何も見出すことはできない。反対にイスラームの倫理概念のすべては常識に訴える力にもとづいている。

それは人間の心を物質の世界から、そして実際の社会活動から離れたものに変えるようにはしていない。むしろ、この物質世界は「創造」の実証的様相であり、それゆえ社会活動、すなわち生活条件を改善しようとする努力は、宗教の欠くことのできない一部であることを主張している。「永遠」と「絶対」の先入観に閉じこめられることなく、イスラームは相対的科学知識の価値を、そして人間の生活それ自体の価値を強調しているのである。

イスラームはこのように「行動の奨励と社会的進歩の正当化に関する動機」を人々に示している。これこそドーソンが「宗教に対する現代の基本的な要求」と述べているものであり、他の思想家の多くも一致している点であろう。

端的にいえば、科学とイスラームの教義の間には、互いに相容れない部分はないし、またこれまでにも決してなかった。そしてそれは、人間の本質とイスラームとの間には、相反するものは何もないというごく簡単な理由による。イスラームの教義が、生活のあらゆる側面、すなわち肉体面、心の状態、社会的組織体の活動などのすべてに、現実的なアクセントを置き、真実と幸福を求める人間の努力に対する効果的な刺激を与えているからである。

「宗教は過去のものである」という叫びは、その最も深い部分において、西欧社会の叫びである。

イスラームの世界では、このような叫びは結局何の意味も持っていない。西欧文明を、唯一の「文明そのもの」とみなすことに慣れた、近視眼的な物の見方だけが、西欧の宗教批判 ― 実は西欧の宗教上の経験によって左右されたもの ― がイスラームとその立場にもあてはまるという錯誤をもたらす。というのは、イスラームの主張のうち、いかなるものも、それが人間の真の要求を十分に満たさぬものはないからである。

訳注　アラビア語の「イルム」は学問全般を指すが「物事を確実に知る」という意味を含むので、「アーリム」はたとえ神学者であろうとも、やはり科学的な心構えを忘れてはならない。

刊行物案内

◆イスラーム入門シリーズ

『サラート』（礼拝）

『サウム』（断食）

『ザカート』（喜捨）

『ハッジ』（巡礼）

『イスラームの生き方』

『ムハムマド』

『イスラームの家族生活』

『イスラームの政治理論』

『イスラームの休日と儀式』

『イスラームと女性』

◆イスラームの雑誌　季刊『アッサラーム』バックナンバー

1号　「メッカ巡礼記」

2号　「メッカへの道」「礼拝について」

3号「わが体験的文明論」
4号「日本人のメッカ巡礼の記録」「日本イスラーム界の草分山岡光太郎」
5号「イスラーム社会の女性の地位」「アラビア語講座」
6号「日訳聖クーランの歴史」「フィリピンイスラーム教徒との接解過程」
7号「東アフリカ沿岸部のアラブ的世界」「アラビア半島縦断記」「ムハムマドアリ・インタビュー」
8号「中央アジアのイスラーム教徒」「イスラーム人物列伝①」
9号「特集メッカ大巡礼」

◆その他の発行物
「イスラームとはなにか」「イスラームの理解」「イスラーム・カレンダー」etc.

御希望のものがありましたら、当センターまで御連絡下さい。

イスラーム諸団体住所録

なおイスラームについての諸出版物をお求めの方は、当センターないし左記の諸団体ならびに方々まで御連絡下さい。

東京

○東京イスラーム　マスジット（礼拝堂）
東京都渋谷区大山町1の19　〒151

○日本ムスリム協会　03（370）3476
東京都渋谷区代々木1の24の4　〒151

○ムスリム学生協会（日本）　03（467）3521
東京都目黒区駒場4の5の29　留学生会館　〒153

○イスラミック・センター　ジャパン　03（460）6169
東京都世田谷区北沢4の33の10　長興マンション2F　〒155

○イスラーム文化協会　03（467）2036
東京都渋谷区富ケ谷2の13の22　〒151
○日本イスラーム教団　03（209）2988
東京都新宿区歌舞伎町16　ロイヤルクリニックビル内　〒160
○日本イスラーム団体協議会（代表斉藤積平）
東京都国立市中2の22の34　〒186
○イスラーム　ウェルフェア　コー　03（833）5991
東京都台東区東上野2の23の8　アルラーフ　アクバル　フタバビル〒110

大　阪○日本回教寺院（ジャパン・イスラミック・モスク）　06（365）1651
大阪市北区梅ケ枝町157　高橋ビル西館2F　〒530

京　都○日本イスラーム友愛協会　075（642）1346
京都市伏見区深草西浦町4の36　築山享設計事務所　〒612

神　戸○神戸イスラーム　モスク　078（231）6060
神戸市生田区中山手通り2の57　〒650

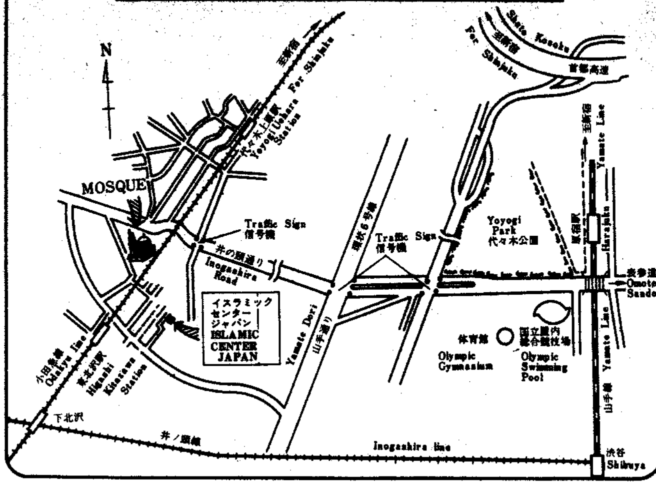
徳　島○徳島鳴門ムスリム協会
木場　公男（カーリッド）０８８６８（６）３０７７
徳島県鳴門市撫養町北浜96　〒772
坂井　積（オマル）０８８６（４４）０３３８
徳島市一の宮町西丁　〒771-31

仙　台○イスラーム文化センター　０２２２（６７）１７１６
仙台市片平1の2の40　セイコービル

金　沢○日本イスラーム青年同盟　０７６２（４４）７０１９
金沢市泉本町1の7の2　泉屋書店　〒921

北海道○北海道ムスリム協会
札幌市東区本町十条6の1の20
小林　０１１（７８１）８３４３
○苫小牧イスラーム　ソサエティィ　０１４４（７２）５１８６
苫小牧市弥生2丁目3の1の711　荒井節雄

Way to the Mosque and to Islamic Center



聖コラーン朗唱テープやイスラームに関する講演・討論会のテープ、その他の諸文献、並びにムスリム諸国に関するフィルムについては、当センターへお問い合わせ下さい。当センターでは、相互理解を深める為、皆様の御利用をお待ちしております。

昭和53年2月1日 発行

発行所 イスラミックセンター，ジャパン

所在地 東京都渋谷区上原３－31－11

〒151

TEL (03) 460−6169

製 作 ジャパン アラブ アソシエテッド

マーケッツ（ジャーム）出版局

東京都品川区１－23－16

TEL (03) 449−0440